

# 東京新聞

中日新聞東京本社  
東京都千代田区千代田1番4号  
〒100-8505 電話 03(6910)2211

世界に選ばれる、信頼のグローバル金融グループに

Quality for You  
誰かナオリティを、明日へ、世界へ



MUFG  
三菱UFJ  
フィナンシャル・グループ

紙面について

●電話 03-6910-2201 (土日祝日除く) 9:30~17:30

●FAX 03-3595-6935

東京新聞ホームページ

TOKYO Web  
www.tokyo-np.co.jp

本紙記者がツイッターでつぶやいています

東京新聞政治部  
東京新聞けいざいデスク  
東京新聞写真部  
東京新聞鉄道クラブ  
東京新聞文化部  
東京ちゅん太(生活部)  
東京レター(外報部)  
東京エンタメ(放送芸能部)

## 「過去に目を閉ざす者は現在にも盲目となる」

### 94歳ドイツ元大統領

ドイツ大統領府は三十一日、元ドイツ大統領のリヒャルト・フォン・ワイツゼッカー氏が死去したと発表した。九十四歳だった。ドイツの戦争責任やユダヤ人迫害の歴史と向き合つよう国民に求め、「ドイツの良心」とも評された。

— 評伝 ⑥面

### 戦争責任直視促す演説



戦後50年の1995年、来日して本紙と会見するワイツゼッカー氏(金沢市で)

一九八五年五月、「荒野の四十年」と題したドイツ敗戦四十周年の連邦議会演説で発した「過去に目を閉ざす者は現在に対しても盲目となる」との言葉は有名だ。ドイツ国民が犯した罪と歴史を直視しなければナチス・ドイツが迫害したユダヤ人や近隣諸国との真の「和解」はできないとの訴えで、国内外で大きな反響を呼んだ。

九〇年十月の東西ドイツ統一でも「統一することとは、分断を学ぶことと演説し、過去を真摯に振り返ることの大切さを主張した。戦後五十年の九五年夏には、本紙の招きで来日。記念講演で「過去を否定する

人は過去を繰り返す危険を冒している」と訴えた。

## 人口減 日本格差拡大 若者に富の再分配を



インタビューに答えるピケティ教授 31日、東京都千代田区内幸町で

来日中のパリ経済学校のトマ・ピケティ教授(四三)は三十一日、本紙のインタビューに答え、「人口減少の進展に伴い日本の所得・資産格差が将来さらに深刻になる」と警告した。金融緩和などアベノミクスが問題を悪化させる懸念があると指摘し、「成長と格差是正を両立させるためには資産課税の強化により、資産を持たない若者などへの富の再分配が必要になる」と提言した。

(池尾伸一、吉田通夫)

ピケティ氏は格差問題を掘り下げた著書「21世紀の資本」が世界各国で注目を集めている。

ピケティ氏は独自に収集した各国の税務データを基に、「日本では上位10%の富裕層の所得の全体に占める割合が、一九六〇年代は30%程度にとどまっていたが、二〇一〇年には40%に上昇し、富の集中が進んでいる」と指摘。非正規労働の割合が四割に達していることにも「企業は彼らには十分に教育しないので新しい技能を得ることができず全体の経済成長を阻害する」と懸念を示した。

さらに、「人口減少が加速するため、日本の経済成長率は将来もっと鈍化する」と分析、「過去に蓄積

東京新聞は昭和初期の新聞の戦争責任について、ジャーナリストの前坂俊之氏(71)に聞きました。前坂氏は「新聞が中国侵略をおおった結果、軍部の増長を招き、太平洋戦争が起きた」と指摘。この間、陸軍の若手将校が反乱した二・二六事件(1936年)以降は、軍部やテロの標的になることを恐れ、新聞が軍部批判を自主規制、萎縮したとの見方を示しました。



### 二・二六事件で新聞萎縮

前坂氏は、日本が中国東北部で軍事衝突を起こした満州事変(三一年)から、二・二六事件までの五年間に着目。当時は軍部による言論統制が比較的緩やかだったため、「報道によって歴史的な状況を変える機会だった」と指摘しました。しかし、多くの新聞は戦争への批判ではなく、侵略を後押しする報道を続けたと振り返りました。

「問い直す戦争」は隔月で掲載します。

「問い直す戦争」は隔月で掲載します。

その上で、成長と格差是正を両立させる策として、富裕層の持つ土地や金融資産に、資産額が大きいほど税率が高くなる「資産累進課税」を導入することを提案。「財源を社会保障や公的な学校への支援に使うことにより資産を持たない若者世代の就職や子育てを容易にすることが有効になる」と指摘した。

一方、政府が進める消費税の引き上げ政策については「消費税増税は若者や低所得者にも負担になる。富の蓄積をしていない世帯の負担は軽くする必要があり経済成長にともなうマイナスイタ」として否定的な考えを鮮明にした。

— 詳細は後日掲載します

### 平和の俳句

戦後70年

いくさせぬ国の誇りの初日かな

大石 誠(77) さいたま市見沼区

〈金子兜太〉初日がとくに大きく輝いて見える。平和だから存分に光の翼を広げることが出来る。(この初日こそ平和な国の誇りと思え。

2015.2.1

問い直す戦争

70年目の視点

核心③ 特集⑩面